慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	紅樓夢の小説性 : 周汝昌の『紅樓夢新證』をめぐつて
Sub Title	The characteristics as a novel of The Hung-lou-mêng. ("The New Lights on Hung-lou-mêng" by Chou Ju-chang)
Author	村松, 暎(Muramatsu, Ei)
Publisher	慶應義塾大学文学部藝文学会
Publication year	1955
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.4, (1955. 2) ,p.73- 89
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00040001-0073

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紅樓夢の小說性

——周汝昌の『紅樓夢新證』をめぐつて——

村松暎

紅樓夢が作者曹雪芹の自傳であるといふことは、現在中國ではほとんど定說になつてゐるやうにみえる。兪平伯は『紅樓夢研究』で「作者の自傳といふこの觀念からすると……」とか「その上、彼の材料はすべてが實事であつて、任意に顚倒改造することのできぬものだから……」(一一六、一二〇)などと、彼の見解を明らかに示してゐる。また周汝昌の『紅樓夢新證』は、そのほとんどが紅樓夢が曹雪芹の自傳であることを證明するために費されてゐるといつてよいくらゐである。

ところで、その小說が自傳であるといふためには、作者の傳記が相當程度まで知られてゐなければならぬはずであるが、この點、曹雪芹に關しては、歿年がほぼ明らかとなつてゐる以外には、生年も推定の範圍を出ず、經歷に至つては皆目不明といつてよいくらゐなのだから、右の自傳說もいささか心細い次第なのである。兪平伯は自傳であるといつてゐながら、その根據は示してゐないので、これについて論ずるわけにはゆかない。周汝昌はその點、非常に豐富な資料を擧げて論じてゐるので、直接資料を手にすることの困難なわれわれにとつては好都合なのである。周氏が自傳說の根據としてゐるのは、曹家に關する資料と、『甲戌抄閱再評本』と『庚辰秋定本』の脂硯齋ならびに畸笏叟の批語である。このうち、曹家に關係した資料は曹雪芹の父曹頫の代までのものしかないので、雪芹自身に關する資料は、まづこの批語だけしかないといつてよいのである。批語といふのは、小說の本文とは別に、いはば書きこみといふ體裁で、本文の途中あるひは空欄に書かれてゐる批評のことである。批評といつても、その目的は本文の禮讚と、讀者の本文への理解を助ける一種の解說のやうな役目にあるのであつて、だから全然客觀的なものではなく、小說に附隨した存在であり、資料として用ゐる場

合には餘程の注意が必要である。ただ、右の脂硯齋と畸笏叟と（周汝昌によればこれは同一人だといふのであるが）は曹雪芹と極めて近い關係にあつた人物だと推定されるので、その批語は紅樓夢の謎を解く鍵として、他の小說の批語とは比較にならぬ重要性をもつてゐる――といふよりも、曹雪芹ならびに紅樓夢を研究する上の最重要資料の一つとして、缺くことのできないものとなつてゐるのである。脂批の重要性は認めなければならないが、それと同時に、これが批語といふものの性質上負はされてゐる制約は免れることはできないのであるから、これを資料として用ゐる場合には、特別嚴密な吟味を要するわけであり、脂批にあるから事實もさうであつたと輕輕しく速斷するやうなことは謹まなければならぬはずである。紅樓夢が作者の自傳であるかどうかといふこと、虛構なしに忠實に自らの經歷を敍述したものであるか否かといふことを論ずる場合の資料としては、やはり小說を離れた一般的な資料をもつてせねばならぬと思ふ。

前にもいつたやうに、周汝昌は豐富な資料を擧げて、紅樓夢が曹雪芹の自傳であり、忠實に雪芹の少年時代の曹家を描いたものであり、多少事實の入れ替へや誇張があるにしても、隅から隅まで事實を描寫したものだといふことを立證しようとしてゐる。ところが私はこの資料を見てゆくうちに、周氏とは別の結論に達しないわけにゆかなくなつた。卽ち、脂批などから見て、紅樓夢が作者の自傳的な要素を相當强くもつてゐるといふことは否定できないが、決して作者の少年時代の曹家を直寫したものではない、そこには多くの虛構が設けられてをり、小說として拵へられたものである、要するにそれは單に自傳的な性格をもつた「小說」である、といふことである。以下周氏の資料を借りて、これを實證してみようと思ふ。

まづ、この小說の舞臺になつてゐる賈家が、雪芹の少年時代の曹家をそのまま寫したものかどうかといふことである。周汝昌は紅樓夢が曹家の史實を忠實に書いてあるものとして、雪芹は自分の眼で見、自ら經驗した榮國府の末世を描いたものだ（『新證』五七五）といふ。そして賈家が既に末世であるといふ「此已是賈府之末世了」といふ甲戌本第二回の脂批をはじめ多くの批語を擧げて、その證據としてゐる。たしかに賈家は、外見は華やかに見えても、實は「以前の面影は見られない」（第二回――不比先時的光景）末世である。しかし、ここに描かれてゐるのは賈家であつて曹家そのものではないといふことを考へなくてはならない。曹家は雍正五年（一七二七）

十二月雪芹の父曹頫の時、罪を得て江寧織造の官職を剝奪され翌年家財を沒收されて北京に移り住んだ（『新證』四一八・四一九）のであるが、この時、曹頫の後任の隋赫德が皇帝に奉つた上奏文に、曹家の家宅搜索を行つた報告がある。それによると當時の曹家は「家人大小男女共一百十四口」とある。これに對して、賈家は末世とはいひながら、榮國府だけで三四百人（第六回――據榮府中、一宅中合算起來、人口雖不多、從上至下、也有三四百了）である。曹家も曹頫の時は末世で到底曹寅の盛大な時にはくらべられなかつたではあらうが、依然として江寧織造の官にあつたのであり、三分の一、四分の一にまで縮小されてゐたはずはない。つまり小說中の賈家は曹家とは比較にならぬ大家として描かれてゐるので、曹家昔日金陵の繁華どころではないのである。北京時代の曹家は、家產も全部ではないが沒收され、お上からお譴めを蒙つた家として、つつましく暮してゐたはずであり、金陵時代からまた何分の一かになつてゐたと思つて間違ひないであらう。この曹家が、雪芹が「自分の眼で見、自ら經驗した榮國府」であらうか。

周汝昌も、小說中の官職爵位などは誇大になつてゐる、といつてゐるが、誇大は官職ばかりではなく生活自體ケタが違ふのである。誇大もいいが、かうあちらこちらを段違ひに誇大にしたならば、單なる誇大ではなくなつてしまふ。榮國府での人間關係などは、雪芹自身の經驗が基礎になつてゐるかもしれないが、生活樣式などは大きな違ひがあつたはずである。周氏は、紅樓夢第三回、黛玉がはじめて榮國府に入り、賈政の住ひの對聯を見るところの脂批に、これが實際にあつた、とあるのを指して、かうした小さなものまで事實をもつて描寫してゐる例としてゐる（『新證』五八〇）。しかし、小さいものだから事實そのままに描寫することができたのだ、といふこともできる。家人三四百人といふ大家は、對聯のやうに簡單に自分の家をそのまま描寫することはできないであらう。その他いろいろのことが脂批を見ると實際にあつたこととして記されてゐるので、曹雪芹が紅樓夢に多くの事實を織りこんだといふことは考へられる。ただ、その規模の大きさは問題である。袁枚の『隨園詩話』に、紅樓夢の大觀園は彼の隨園を描いたものだ、とあるが、これがあてになるものかどうかはわからないとしても、第十七回、賈政が園を檢分して廻るところを見てもわかるやうに、足が棒になるほど步いても廻りきれないほどの大觀園を、家產を沒收されて（殘らず沒收されたわけではないらしいが――『新證』四一九）北京に移り住んだ曹家が造築できやうとは考へられない。それが隨園かどうかは別として、どこかの大家の園をモデルにしたといふことは、ありさ

うなことである。いづれにせよ、賈家の生活がそのまま北京の曹家の生活ではなかつたと、大ざつぱにさういふことだけはいへると思ふ。

次に人間關係である。曹霑（雪芹）の父曹頫は、曹寅の弟の子で、寅の實子曹顒の死後（この時には既に寅は死んでゐる）、養子として寅の跡をついだのだと周氏はいふ。曹頫の父が曹寅の双兒の弟曹宣であるといふ說（『新證』――「迷失了的曹宣」の章にくはしい）はそのまま受けとつてよいかどうか疑問の餘地があるやうに思ふが、寅の妻李氏の兄李煦が康熙帝に頫を養子として職を襲ぐことを許されたお禮を言上する上奏文に「……向臣妹宣示恩旨、主子俯念孀居無依、恐你一家散了、特命曹頫承繼宗祧、襲職織造、得以養贍孤寡、保全身家……」とあるところを見れば、曹頫が養子であつたことは事實であると思はれる（この事情は『新證』四八――五〇。四〇三――四〇七にくはしい）。

ところがかういふことになると、問題なのは小說である。作者は第二回に、賈代善と史太君との間に子供が二人生まれたとはいつてゐるが、賈赦も賈政も養子だとはいつてゐない（長子賈代善襲了官、娶的也是金陵世勳史侯家的小姐爲妻、生了兩個兒子、長名賈赦、次名賈政）。紅樓夢が曹雪芹の自傳であるならば、作者自身たる寶玉の父賈政は養子でなければならないだけでなく、兄までゐるとなつては厄介である。ここにこそ雪芹の深刻な苦しみがあるのだ（『新證』七二）と周氏はいふ。だが、その實苦しんでゐるのは曹雪芹ではなくて周汝昌ではあるまいか。紅樓夢が曹家の事實を寫したものであるならば、ほかにいくらでも憚るべき醜いことが暴露されてゐる。天子の裁可まで得た養子の問題を、なにを苦しんで隱さなければならないのであらうか。しかし、周氏は紅樓夢をよく讀めば、右の養子の件が、それとなく覗はれるといつてゐるのだから、以下『新證』第二章第三節「一層微妙的過繼關係」によつて、それを見てゆくとしよう。

まづ、周氏は賈家における賈赦の曖昧な地位に目をつける。まつたく賈赦の地位は腑におちない點が多い。彼は長子だのに、母史太君と一緒には住まず、榮國府の一角を別に仕切つて住んでゐるらしい（第三回――黛玉度其房屋院宇、必是榮國府之花園、隔斷過夾的）。作者はこの理由については、何等說明してゐない。周氏の考證によれば、曹寅が棟亭詩鈔別集の中で多才だといつて褒めてゐる

甥がある（『新證』四七）、これが賈赦に當る人物だ、といふことになつてゐる。しかし、賈赦は女好きで無能で、不出來な息子として描かれてゐるので、右の多才とはおよそ緣の遠い人物である。それはともかくとして、周氏が賈赦の地位を不可解だとする理由は三つある。第一は右にのべた住居の問題、第二は史太君と賈赦との關係が親子とは思はれぬ冷たいものだといふことである。第五十三回、上元節の日、史太君が主催の宴會に人々が集ふのに、賈赦はさつさと自分の住ひの方に引揚げてしまひ、史太君もその方がお互ひに氣樂でよからうと、引留めもしないのである。もつとも、賈赦は家へ歸つて食客たちと、美形を侍らせて飲めや歌へで大いに樂しんだわけなのだから、母親のそばに畏つて芝居なんぞ見物するよりは、たしかによかつたに違ひない。史太君も彼のさうした性格を知つてゐるから引留めないのだらうが、母子の間柄としては不可解ではある。第三は、人々がいづれも賈母や賈政の住ひと賈赦の住ひとを區別して「こちら」とか「あちら」とかいつて、一家とは思はれないといふことである。

右のことから、周氏は次のやうな結論を下す。賈赦と賈政とは本當の兄弟で、二人とも曹宣（曹雪芹の父頫の實父）の嫡子であるが一人が養子となつたので、これを別々に書き分けるとなると、ひどく煩雜になるし、作者としては養子關係を人に知られたくないといふ意味もあり、またこの小說で活躍する鳳姐夫婦は賈赦の息子と嫁なので彼等を省くわけにもゆかず、そこで曹宣の子供たちをそつくり史太君の系統にもつてきて一つにまとめてしまつたのだ、「つまり賈赦は賈母の子ではない」（『新證』七四）といふことになる。かういふわけで、母子でないものを母子として描いたために、いろいろ不可解なことが出てきたのだといふわけである。そして、曹宣の家人を史太君の系統にまとめてしまつたのだから賈赦のところには妻妾召使などのほかに老人が住んでゐる可能性がある、雪芹の筆は非常に細心ではあるが、それでもこの事情の漏れてゐるところがある、と第五十三回、除夕の祭を例としてゐる。なるほどこの儀式に、史太君と同格の妯娌（ちうよう）といふ老女が二三人（賈母一輩的兩三個妯娌）出てゐる。儀式が終つて史太君が家に歸ると、あとからそのうちの二人の老女が挨拶にやつてくる。この老女たちについては、どこの誰とも全然說明がないのである。で、周氏はこれについて次のやうに說明する。史太君の夫賈代善と長幼の順からいつて同格なのは寧國府の賈代化である。この「代」の字の一輩で小說に登場するのは賈代儒だけで、代儒夫人は史太君と妯娌といへる、殘りの二人は——これこそ曹宣と曹宜（ともに曹寅の弟）の夫人、つまり小說中の史

太君の弟嫁に當る人で、賈宣の夫人は榮國府の一角（つまり賈赦の住ひ）に住んでゐるのであり、賈赦は彼女の息子であつて史太君の息子などではない云々。

まともにものをいふのが少々馬鹿らしくなる。周氏は曹雪芹に斷りもせずに、賈赦に別の母親をさがしてやつたといふわけだ。一體作者はどこで、この老女が榮國府の一角に住んでゐるなどといつたのか。第二回で作者が冷子興の口を借りて、史太君に息子が二人生まれ、長男が赦で次男が政……といつてゐるのはどうなるのだらう。そこが雪芹の苦しいところで……といふわけだらうか。

周氏が賈政を養子であるとする根據はいくつかあるが、いづれも史太君との感情がしつくりいつてゐないといふことである。『紅樓夢人物論』の筆者太愚もこの點をいぶかつてゐるので（困みにいふ、この『人物論』を讀んでみると、太愚氏はあまり頭のいい人ではないらしい）周氏は「それはさうさ、赦も政も史太君が腹を痛めた子ぢやないんだから」と、いささか得意の面持で、太愚の擧げてゐる例を引いて分析してみせる。第二十二回、史太君をかこんで燈謎をして遊ぶところである。子供たちは賈政がゐるので固くなつてゐて少しもくつろがない。史太君がそれを察して、いい加減なところで、行つてお休み、と賈政を追ひ立てようとする。――賈政は急いで笑顏をつくり「今日實は御隱居樣がこちらで盛大に正月の燈謎を催されると聞きましたので、私も綵禮酒席を設けて、わざわざお仲間に入れていただきにきたのです。どうして孫たちをいとほしむお氣持を、いくらかでも息子にはお分ち下さらないのでせうか」――見よ、彼は滿面笑をうかべてはゐても、これらの言葉の何と重く悲しげであることか！（看他，雖是滿臉陪笑，而幾句話是何等沈重與歎嘅！七六頁）これが周氏の「分析」である。無闇と深刻がつては困る。賈政は人格者ではあるが、いささかつきあひにくい雷親爺である。だからこの席では寶玉は勿論、おしやべりの史湘雲までが固くなつて默りこくつてしまつてゐるのである。孫に甘いお祖母さんが、孫たちを氣樂にしてやり、自分も一緒に樂しく遊ばうと思ふから追ひ立てたのだ。右の賈政の深刻な言葉につづいて――賈母は笑つて「お前がここにゐると、彼等は笑ふこともできない、私まで氣が滅入つてしまふではないか……」――とある。實はここでは史太君と賈政はむしろしつくりいつてゐるのだ。これにつづいて史太君と賈政が謎あてをして、賈政はすつかり母の御機嫌をとり結んでしまふのである。史太君は「非常に喜んで」（甚喜）お父さんにお酒をついでおあげ、と子供たちにいひつけることになるのだ。惡く解釋

できるところだけとり出せば、喜劇だつて悲劇に見えるだらう。

次の例は、事實、話はもう少し深刻である。第三十三回、賈政が寶玉をひどく打つたといふので、史太君が賈政を怒りつけるところである。ここにいくつかの事柄が明らかにされてゐる、と周氏はいふ。それは五つに分けられてゐるが、第一は、史太君が激怒のあまり、いい息子を持たなかつたといふ本音(沒養個好兒子的眞情)を吐いてしまひ、賈政は觸れてはならぬ關係まで史太君が口にしたのを聞いて、あんまりだ(不像)、と思ふ。——この史太君の言葉は、賈政が寶玉を血まみれになるほど打ち、大騒ぎになつて史太君がその場へ駈けつけると、賈政が會釋笑ひをして「暑い中をわざわざおいで下さらなくてもお話がおありなら私の方から出向きましたのに」といつたのに對して、「わしは悲しいことに生涯よい子を持たなかつた、誰と話せばよいのだ」と、手きびしく賈政をキメつけたところである。史太君は「よい」子を持たなかつた、といつてゐるのだ。子を持たなかつた、とはいつてゐないのである。賈政も次にその言葉がある通り、先祖の名を汚したくはないから子をしつけてゐるのに、それは「あまり」な言葉だと聞いたのである。

第二、やはり史太君が賈政にいふ言葉で、「以前お前のお父さんは、どんな風にお前をしつけなすつたか」(當初你父親是怎麼教訓你來)といふのは、曹寅が生前、曹宣の子たち、つまり甥たちをどんなに可愛がつたかといふ意味だ。——一體、右の言葉のどこから曹寅だの、まして曹宣だの甥だの養子だのが飛び出してくるのであらうか。まことに不思議な解釋もあるものである。

第三、賈政が養子になつて後、賈母は賈政をこれまでにしたのだが、二人の心は一つになつてゐない。——これは何のことをいつてゐるのか私には分らない。ここでは賈政が養子だといふことを探り出すつもりではなかつたか。賈政が養子として扱はれてゐるのなら、もう問題はないはずである。

第四、史太君が賈政にいふ「私はお前の奥さんや寶玉と、今すぐ南京に歸る」(我和你太太、寶玉、立刻回南京去)といふのは、南京には曹寅以來の家がいまだにあること、また彼女が母子の關係を斷たうとしてゐることを示してゐる。——周氏はよほど單純な人である。女が、出ていけばいいんでしよ、といふ時には、大抵出てゆく氣はない。まして母親が「どうせあたしがゐちや邪魔なんだらうから出ていきますよ」などといふ時には金輪際出てゆく氣はないものだ。この言葉は母親の息子に對する切札である。

大體、周氏は自分の都合のよいところだけ拔き出してゐるのだ。史太君がかういふきついことをいふ前に、王夫人も似たやうなことをいつてゐるのである。彼女は賈政が寶玉を打つてゐると聞いて、駈けつけてとめようとするが、賈政は耳をかさぬだけでなく、繩で寶玉を絞め殺すといひ出す。そこでいよいよ奥の手である。「今日どうあつてもこの子を殺すと仰しやるのは、きつと下心があつて、わたくしと緣を切らうとなさるのでせう。この子を殺さうとなら、さあ、繩をお持ちになつてまづわたくしを絞め殺し、その上でこの子を殺して下さいませ。わたくしども母子、恨みになどは思ひません、結局あの世で賴りあふことができるのですもの」この言葉から、王夫人は賈政の後妻で寶玉は連れ子に違ひない、彼女は先夫を忘れ得ないために、その子の寶玉を賈政より愛している、彼女は賈政と生きるよりも、寶玉と共に死ぬことを望んでゐる、などといへるであらうか。變に裏を考へたり、むやみと言葉通りに受取つたりしたら、相當奇妙な解釋でも成り立つものである。

史太君のいふ「わかつたよ、お前はわたしたち母子にいや氣でもさしたんだらう、わたしたちはもうお前と別れた方がいい、さうしたら皆さつぱりするわけだ」(……我猜着、你也厭煩我娘兒們、不如我們早離了你、大家乾淨)といふのは、いやがらせである。南京へ歸るといふのも脅かしである。それがわかつてゐるから召使たちは、轎と馬の用意をしろ、と命ぜられても動かないのだ。賈政の手前もあるわけだが、本當に歸るといふのなら用意をしないわけにはゆくまい。大體、すぐに歸る、といつても、持物の整理もしなければならぬはずで、隣へゆくやうに今すぐといふ具合にゆくわけがない。

この時の賈政の折檻のしかたは常識外れで、食客たちも慌ててしまふし、王夫人は半狂亂になつて死んだ長男の名を呼びつづける、といつた有樣になるくらゐなのである。王夫人でさへ夫にきつい言葉を吐くくらゐなのだから、母親の史太君が手きびしい怒り方をするのは當り前のことだ。周氏は史太君の言葉だけ切離して見るから變なことになるのである。

第五、寶玉は史太君の命の種(命根)で彼に萬一のことがあれば、史太君は「立足之地」をなくしてしまふ。——これはこの小說を讀めば明らかなことで、この三十三回を讀んではじめてわかるといふやうなとこではない。ここではそれがはつきりと言葉に現はされてゐるだけである。

周氏は科學的考證を力說してゐるが、しばしば科學の領域を逸脫する。「人物考」に、

大姊（雪芹を中心としていふ）某、頫長女選入宮爲嬪妃。〔天〕　按：卽紅樓夢所敍之元春云々。（『新證』九八）

といふのがある。この「大姊」に關する資料は小說紅樓夢に登場する元春以外にないのだから呆れる。史實をもつて小說を考證し、小說をもつて史實を考證すれば、すべてが事實になるのは當然である。『淸史』にも『淸史稿』にも曹姓の妃は發見されない、と周氏自らいふ。もし將來、乾隆朝の文獻に曹姓の妃に準ずるもの（佳氏）が發見されれば、元春の確證だ（四六八）、といふが、それが發見されないうちは、この「大姊」は伏せておかなくてはなるまい。曹家は康熙帝の寵をうけ、康熙はほとんど南巡のたびに曹寅の役所を行宮としたほどであつたが、寅が死に、雍正の代になると忽ち嚴しい譴をうけたのである。曹霑の大姊が宮中に入つたとすれば、この雍正の時でなければならなかつたはずであるが、さういつた可能性があるかどうか――太子の乾隆にそれができたかどうか、ここにも疑問の餘地があると思ふ。「人物考」にはこの大姊のほか、二堂姊（迎春）、三妹（探春）、四從妹（惜春）、表妹（黛玉）、姨姊（寶釵）、表妹（史湘雲）等、紅樓夢以外に文獻のないものが數多く擧げられてゐる。

それはともかくとして、周氏のおかげで雪芹の父曹頫が養子であつたことが判明した。周氏は賈政が史太君の養子であるといふことを證明しようとしたが、それはわれわれを納得させるに十分でなかつた（それは當り前のことで、作者が、史太君が賈赦と賈政を生んだ、とはつきりいつてゐるのだ。それに對してゴタゴタいふ方がをかしい）。とすれば曹寅の妻李氏と頫との關係が、そのまま紅樓夢に寫されたのではない、といふことがはつきりしたわけである。なほ、頫の養子問題が康熙の許しを得た時の、李氏の兄李煦の上奏文に「奴才李煦跪奏……念其孀母無依……特命將曹頫承繼襲職、以養贍孤寡……」（『新證』五〇）とある。其孀母といふのは李氏で、李氏には曹顒の死後、賴るべき子がなかつたことを示してゐる。だから康熙は曹頫の養子を許し、彼女の老後を見させたのである、この「孀母無依」は賈赦の存在を抹殺してしまふに十分である。賈赦は假空の存在である。この重要な二人の人物に作者の創作の手が加へられてゐたとすれば、そのほかにも作者の創造した人物、實際の關係を變更した人物が、いく人かあるといふことは想像するに難くない。いづれどこかにモデルはあつたかもしれないが、作者が自分の近親の者を、すべてありのままの關係において描き出したものでな

いことは確實である。

周氏は、曹雪芹の自傳であるといふ先入主をもつて紅樓夢を讀んでゐるので、そこら中がやたら怪しげに見えてくるのである。そして一度解釋が狂ふと、とめどがなくなつてくる。『新證』第二章七八頁に彼は次のやうなことをいつてゐる。――曹頫は母親との間が十分圓滿にゆかぬので、兄の賈赦（このいひ方も少しをかしい）と親密になつてゐる、だから賈赦の長子賈璉夫婦をつれてきて家政を見させてゐるのだ。――賈璉夫婦が賈政の下へきて家政を執つてゐるのは事實だが、紅樓夢のどこに、賈赦と賈政とが特に親しいなどといへるやうなところがあるのだらう。彼等は兄弟でも性格もまるで違ふし、親しく語りあふといふこともなく、むしろよそよそしい兄弟に描かれてゐる。周氏が根據としてゐるのは、第七十五回、中秋の月見の宴で、賈赦が親といふものを皮肉つた笑話をして、史太君の御機嫌を損じるところである。――讀者はこれを、賈赦が、史太君が賈政の一門ばかり可愛がつて自分の方を可愛がらないのを皮肉つたのだと解釋してはならない、それは大變な誤解だ。賈赦はもともと養子でもないのだから、心が片寄つてゐるのゐないのといふ話などし出すわけがない（親の心は片寄つてゐるといふ笑話なのである）。彼は明らかに賈政と兄弟だから、ぐるになつて、實は史太君が實の親でないので本當に賈政を愛してはゐないことを皮肉つたのだ……。――といふわけである。しかし、ここを素直に讀めば、賈赦の笑話がそんなに根を持つたものではないことはわかるはずである。作者が次にいつてゐる通り「（賈赦は）すぐに、うつかり失言したと氣がついて」（便知自己失言冒撞）母の御機嫌をとる、史太君もいつまでも氣を惡くしてなどゐないのだ。

周汝昌は紅樓夢八十回以後の續作者高蘭墅を罵倒して、われらの偉大なる傑作を身のほども知らずに續作などして、せつかくの悲劇的結末を臺なしにしてしまつた高鶚の罪狀を天下に告げ、曹雪芹の仇を報じなければならぬ、と力みかへつてゐる（『新證』五八三）が、いづくんぞ知らん、夫子自身は非才をもかへりみずにこの傑作に勝手な解釋を加へ、雪芹が明らかに子だといつてゐるのを養子だといつて作者に逆らひ、讀者の正しい理解を妨げんものと狂奔してゐるではないか。

次に全體の構成である。はじめに述べたやうに、曹家は雍正六年に曹頫が官を罷免になつた揚句に家產沒收といふ悲運に見舞はれてゐる。右の事情は『新證』第六章「史料編年」によつて、あらかた知ることができる。曹家の最盛期は曹璽から曹寅にかけての時であ

つたらしい。特に寅は康熙帝と並々ならぬ親密な間柄であつたやうである。康熙の南巡の折にはほとんど必ずといつていいくらゐ寅の役所を行宮にしたことは前述の通りだが、ここに今一つ恰好な例がある。曹寅は康熙五一年（一七一二）七月風邪をひいたのがもとで瘧になり、帝に藥を賜りたいと義兄の李煦に代奏させ、康熙がこれに答へた硃批がある。「よく教へてくれた、さつそく瘧の藥をやるが、手おくれになつてはならぬから驛馬を晝夜通して駈けつけさせよう……」（你奏得好、今欲賜治瘧的藥、恐遲延、所以賜驛馬星夜趕去）そして藥に添へて「もし瘧でなければ、この藥を用ゐてはならぬ、必ず見定めるやうに、くれぐれも……」（若不是瘧疾、此藥用不得。必須認眞、萬囑萬囑萬囑）曹寅はこの七月二十三日に死に、曹頫が職を繼ぐ。頫の代になつてからの上奏文には、父の殘した赤字を埋めてほしいと願ふものが多く、これは曹頫の代までつづくのである。曹寅は清廉な官吏だつたらしく、生活も派手ではあつたが、皇帝の南巡接駕が度重つて無理をしたのだらう、と周氏は解釋してゐる。しかし、寅の死後いつまでも赤字が絶えないのには、怪しい點もあつたらしい。李煦も始終赤字を報告してゐるが、煦は相當な貪吏であつた證據が殘つてゐる（四〇九頁）。康熙は、官吏の不正も生活上ある程度はしかたがないといふ考へで、相當寛大な態度であつたらしいが、雍正になると事情は一變して、その元年（一七二三）すでに李煦、曹頫の赤字に對する取調べが行はれ、その報告が雍正のもとに出されてゐる。そして五年、李煦は下獄（彼は赤字のほかに餘罪が發覺してゐる）、十二月に曹頫は罷免、翌六年の春にかけて家產の沒收が行はれ、頫の後任江寧織造隋赫德から雍正に報告が出てゐる。これを見ると沒收財產は全部ではないらしく、一部は生活の資として殘されてゐる。周氏は曹頫の罷免等には、赤字だけでなく李煦の影響があつたであらう、といつてゐるが、この推測は正しいかもしれない。この雍正六年（一七二八）に曹家は北京に移り住むのであるが、周氏の說によれば、この時雪芹は五歲である。

ところで、周汝昌に紅樓夢は曹雪芹の自傳であり、隅から隅まで事實だといふ確信を持たせるに至つた根據の一つは、彼の作成した「紅樓年表」である（第五章「雪芹生卒與紅樓年表」）。この年表は、大體諸本の正しいと思はれるものをとつてよくできてゐる。しかし、問題なのは、年表が單によくできてゐるといふことではなく、周氏にいはせると、この年表によれば、雪芹の實際の年齡と書中の寶玉の年齡とが完全に一致しながら進行してゐるといふことである。雪芹の出生の年、雍正二年を寶玉の一歲とすると、雪芹が十三歲

の時、寶玉もちやうど十三歳になる（これは當り前で、出生の年を双方合せておけば、年表が狂つてゐない限り兩者の年齢は平行して進んでゆく道理だ）。ところでこの年は書中第十八回から五十三回にわたり最も詳細に描かれてをり、重要な年であるが、この年こそ歴史の上においても重要であり、曹家に最も大きな關係を有する乾隆改元の年である。小説ではこの年の芒種節が四月二十六日と記されてゐるが、萬年曆によれば乾隆元年の芒種節は、やはり四月二十六日である。雪芹はこの年に元妃の省親のことを描いてゐるのであるが、事實、乾隆は卽位後同樣のことを企ててゐる（第七章四六七參照）。――大體かういつたわけである。

雪芹の生年が雍正二年だといふのは、胡適の康熙末年說よりよほど正確だと思はれるので、そのまま承認しておくとしても、雪芹と寶玉との年齢が合致してゐるといふのは、先にのべた通り問題にならない。乾隆元年に嬪妃の省親（里歸り）といつたやうなことがあつたとしても、曹家から妃が出てゐたといふ證據がなければ、元妃の省親が曹家の史實を描いたものだとは斷言できないはずである。また、周氏が、乾隆元年は曹家にとつて最も大きな關係を有する年だ、といつてゐるのは、『新證』第六章「史料編年」雍正十三年（一七三五）の項に、この年、雍正が死に乾隆が卽位して、曹頫が雍正五年免官以來はじめて內務府員外郎の官につくことができたとあることを含めてゐるものだと思はれる。周氏は、雍正、乾隆二朝の交替が、曹家の敗事と中興の二大關鍵だ、といつてゐる。實際、乾隆の卽位によつて政情が一變したらしく、この年の勅令（誥命）で、曹宜（寅の弟、雪芹の叔祖父）は護軍參領兼佐領加一級の官にあり、その祖父曹振彥は資政大夫に追封され、振彥の原配歐陽氏、繼配袁氏はともに夫人を贈られたことが知られる。たしかに乾隆は曹家に惡感情を抱いてはゐなかつたであらう。しかし、周氏の資料には何等曹頫に關する事實は見當らない。では周氏がこの年、曹頫が內務府員外郎になつたとする根據は何か。それは紅樓夢第二回、冷子興の話に、賈政が今ではもう員外郎に昇進してゐる（如今現已陞了員外郎了）、とあることである。これは紅樓夢の第七年、寶玉七歳、彼の生年を雍正二年に當てると、雍正八年のことで、乾隆卽位には五年の間があることになる。しかも、乾隆卽位の雍正十三年、乾隆元年にも曹頫が員外郎に就任したといふ資料が見當らないとすれば、これは單に周氏の臆測にすぎないといふことになる。雍正中不遇であつた連中が乾隆に入つて續々返り咲いたとしても、傅鼐が刑部尙書になり、福彭が正白旗滿洲都統になつたことをもつて、曹頫が員外郎になつた證據に代用することはできないはずである。

かう見てくると、この年表が史實と一致するのは、四月二十六日の芒種節だけだといふことになる。これだけで紅樓夢の史實との「驚異的な」一致を云々されてはたまらない。

曹家には、先にのべたやうに、雍正五年に曹頫の免官、翌春には家產沒收、北歸といふ大事件がある。この事實は紅樓夢のどこにもその暗示すら見當らない。紅樓夢が史實を直寫したものならば、寶玉四、五歲の折に當然賈家を根本から搖ぶるやうな大事件が發生してゐなければならぬはずである。賈家の末世といふのは、このやうな悲慘事に遭遇した後のことを指すのではなく、第二回、作者が冷子興の口を藉りて說明してゐるやうに、人々が富貴をよいことにして、家政を等閑にして派手一方に暮してゐ、子孫が一代ごとに無能になつてゆくために、表面は華やかにみえても內實は苦しくなつてゐる、といふのである。依然として王侯貴族と往來して、いささかもひけ目は感じてゐないのだ。賈政も官を免ぜられたやうなことはない。破局はこれからおとづれるのである。

曹雪芹は、八十回、未完の紅樓夢を殘してこの世を去つてしまつた。この八十回まででは、迎春が不幸な結婚をしたことと、第七十四回、女中たちの持物を檢查して賈家の末世症狀も相當なところまできてゐることを感じさせるくらゐのところで、破局にはまだ間がある樣子である。したがつて、それ以後のことは、本文の中の暗示と『甲戌』『庚辰』兩本の批語とから推測するほかないわけである。ところでかうなると、本文の暗示はよいとして、批語にいつてゐることが、どの程度信賴できるかといふことが問題になる。この點については、俞平伯も周汝昌も、雪芹が八十回以後の原稿を書いたといつてゐる。俞氏がその證據としてゐるのは『甲戌本』第二十六回の總評で、「……惜衞若蘭射圃文字迷失無稿、嘆嘆」とあり、その下に「丁亥夏畸笏叟」と署名があるといふ（『紅樓夢研究』二一三）。また、周氏は「五六稿被借閱者迷失」といふのを引用して、その原稿は、借りていつた人と脂硯齋など少ぐとも二三人は讀んだはずだ、といつてゐる。ただし周氏の引用はどこから引いたのか明記してゐない（五八九）。とにかく、雪芹は原稿を書いたのかもしれない。脂硯齋本の批語には、八十回以後のことに觸れたものが相當にある。少くとも批者は雪芹の腹案は聞いてゐたであらう。脂批がさう無責任のものとも思はれないので、相當信賴できるものだと思ふ。

八十回以後の紅樓夢では、あらゆる凶事がつぎつぎと起つて、賈家は敗滅してゆくらしい。そして、その凶事の中には、家產沒收

（抄家）の事があるやうである。兪平伯は、『研究』の「八十回後的紅樓夢」の章でもこのことに觸れてゐるが、「後三十回的紅樓夢」の章（二〇九）では、この抄家が賈家敗落の最大直接の原因であるとのべ、「此係未見抄沒獄神廟諸事、故有此批」といふ第二十七回脂庚本（庚辰本）の硃批を掲げてゐる。また、周汝昌は、第八章第四節「從脂批認識曹雪芹」に脂批から見た賈家敗落の原因七項目を擧げてゐるが、その中にやはり抄家が數へられてゐる（五九七）。第七十五回、王夫人が親戚の甄家が罪を被つたことを史太君にしらせると、史太君はそれには答へず「ひとの家の心配をするよりも、お月見の相談をしよう」（賈母點頭嘆道「偺們別管人家的事、且商量偺們八月十五日賞月是正經」）とだけいふ。ここに批語があり、「賈母已看破狐悲兎死、故不改正、聊來自遣耳」とあるといふ。史太君は賈家もいづれは同じ運命をたどるべきことを察してゐたのだ、といふ批語は、この場合大きな意味をもつてゐる。これは第七十四回の探春の言葉と相應ずるものである。探春は王夫人の命令で女中たちの持物を調べた鳳姐にいふ。「あなた方、急ぐことはありませんよ。あなた方だつてお調べを受ける時がくるんですからね。あなた方は今朝甄家のことを取沙汰しておいでだつたぢやありませんか。自分の家中を、わけもなしに調べたりしたら、本當にお調べを受けてしまつたつて。わたしたちのところにも、そろそろ番が廻つてきたのです。……」（……你們別忙、自然連你們抄的日子有呢、你們今日早起、不曾議論甄家、自己家裡好好的抄家、果然眞抄了、偺們也漸漸的來了、……）周氏はこれを内からの崩壞の兆と見てゐるが、それと同時に、官檢の手によつて賈家が抄家をうける豫言と見てよいと思ふ。紅樓夢には至るところに豫言（この場合のやうにはつきりした形をとらなくても）が隱されてゐて、それが後に現實となつてあらはれるのである。とにかく、賈家が後に抄家といふ變事に見舞はれることになつてゐたのは、たしかなやうである。

では、曹家は前後二回抄家に遭つたのであらうか。乾隆以後の曹家については、ほとんど記錄は殘つてゐないらしい。ただ乾隆二十二年（一七五七）あたりから後の雪芹のことが、敦敏、敦誠の詩集に見られるだけである。これは既に甲戌本が世に出てから後のことである（甲戌は乾隆十九年、一七五四）。「雪芹酒渴如狂、余解佩刀沽酒而飲之、雪芹歡甚、作長歌以謝余」（敦誠詩序）「曹子大笑稱快哉、擊石作歌聲琅琅」（同詩）「高談雄辯虱手捫」（敦誠詩）「滿徑蓬蒿老不華、擧家食粥常賒、衡門僻巷愁今雨、廢館頹樓夢舊家」（敦誠詩）雪芹のひととなりが覗はれると同時に、貧窮してゐたことも知られる。紅樓夢に描かれてゐる生活に、多くの事實があることは

脂批から見て、たしかなことであると思はれるので、少年時代には雪芹は貧乏暮しはしなかつたと見てよいだらう。とすると、彼の青年時代、あるひはそれを越したころに何事かが曹家にあつたかもしれない。この間の消息を知る手がかりは何も發見されてゐないのである。周氏のいふやうに、乾隆元年のころ、曹頫が再び官についてゐて、且つ先に記したやうに抄家といふ事件があつたのならば、何か記錄がのこつてゐてもよささうに思はれる。兪平伯は「甄士隱は寶玉の影子である」といふ顧頡剛の說に贊成してゐる（『研究』一九二）が、周汝昌も同じ考へで、曹家に後に起つた變事の一つは、士隱の場合と同樣に火災であるかもしれない（四二九）、といつてゐる。あるひはさうかもしれないが、これも臆測にすぎない。

周汝昌の『新證』第六章「史料編年」四二五頁。

一七四五　乾隆十年　乙丑

曹霑二十二歲。時曹氏因遭鉅變、家已頓落。（以下略）

ここにいふ「鉅變」がどんなことであるのかは、右にのべた通りで、知ることができないのである。鉅變が實際にあつたのかどうかすらわからない。しかし、紅樓夢の賈家には鉅變が起るらしいのである。これは、曹雪芹が小說の筋立てとして、自分の幼時に曹家を襲つた抄家といふ悲慘な出來事を、賈家の破局にもつていつたのではなからうか。これは勿論臆測でしかないが、寶玉の幼時に、雪芹の幼時に曹家に起つた抄家を思はせる事件が描かれてゐないことは、この臆測に多少の根據をもたせることになりはしないだらうか。とにかく、この、一家にとつての大事件の起きる時期の、大きなくひちがひは、紅樓夢全體の構成が、決して曹家の史實そのままではなく、雪芹の手が入つてゐることを思はせるに十分であらう。かう見てくると、元妃の省親といふ出來事も、後半の賈家の悲劇を一層効果的に見せるための技巧と考へることもできる。乾隆初年に、この省親を思はせる事があつたとすれば、雪芹はそこからこの出來事のヒントを得たのかもしれない。雪芹の「大姉」が妃あるひはそれに準ずる地位にあつたといふ證據がない以上、さう考へた方が、むしろ無難ではあるまいか。登場人物のモデルは身近な人たちであつたかもしれないし、生活の雰圍氣には作品に似たものがあつたであらう。しかし、人間關係は實際以上に複雜であり、少くとも八十回までの生活は實際よりずつと華やかであつたに違ひない。兪平伯

は、紅樓夢の人物は寶玉をはじめとして、みな平凡だといつてゐるが、さうは思へない。寶玉も、彼のまはりの女性群も、理想化されたものであると考へる。中國の數多い小說の主人公のやうに、缺點を持たぬ、必ず試驗に合格して立身出世するものだけが理想化された人物ではない。寶玉は「意淫」の人、「癡人」として理想化された人物である。缺點を持つてゐるから平凡だとは、單純極まる考へである。寶玉の缺點は、すべて禮教的な眼から見た缺點だ。禮教的な典型的人物は、曹雪芹の最も輕蔑するところである。

最後に、曹雪芹の創作動機に、簡單に觸れておかう。第一回のはじめに作者は自らの創作動機を語つてゐる。これは二つに分けられる。一つは、風塵に碌々として、つひに何一つまともなことを爲し得なかつた自らの罪を懺悔すること。その二は、その昔、自分のまはりにゐた女性達のことを書く、といふことである。しかし、一については、雪芹自身のいつてゐることではあるが、そのまま受取るわけにはゆかない。これは文人的逆說と考へるべきである。この小說の中で、作者は寶玉の口を藉りて、徹頭徹尾禮教的な世俗の常識に反抗してゐるではないか。最後に寶玉が俗世に敗れ、出家して世を脫れる（脂批からこの結末は察せられる。本文にも暗示がある）としても、それは世俗の正しさを認めたのだといふことにはならない。世俗と妥協しなかつた寶玉を、作者は正しいものと思つてゐたに違ひない。

二は、これに反對すべき理由は見當らない。だが、作者はすべての女性を平等に考へてゐたのであらうか。俞平伯は、紅樓夢の目的の一つが、十二釵の本傳を書くにある（『研究』一一〇）といつてゐる。寶玉は美しい女性はすべて愛するが、彼が戀をしてゐるのは黛玉に對してだけである。黛玉が若くして死ぬことは、第五回、「金陵十二釵正册」によつても、また「紅樓夢十二曲」によつても知られる。ことにこの「十二曲」では「終不忘世外仙妹寂寞林」といつてゐる。作者は早くこの世を去つた戀人との戀物語を書かうとしたのである。少くとも、それが紅樓夢創作の動機として、最も大きなものの一つであることは間違ひないであらう。周汝昌もこの點については同意見である。彼は『新證』第八章第三節五七八頁に、第二十二回、寶玉が、林黛玉と史湘雲との仲をとりなさうとして、かへつて不首尾をしでかし、黛玉に詰問されるところの批語「問的却極是，但未必心應，若能如此，將來淚盡夭亡，已化烏有，世間亦無此一部紅樓夢矣」を擧げて、次のやうにいつてゐるのである。「この批は明らかに寶、黛二人の關係、つまり作者と黛玉との關係をのべて

ゐる。二人は互ひに忘れることはできなかつた、だから黛玉の死後、雪芹は彼女を追憶してこの書を作つたのだ」。曹雪芹としては、曹家の史實を忠實に（したがつて彼自身の經歷も忠實に）書くつもりはなかつたに違ひない。

曹雪芹は單なるレアリストであつたのではない。彼は死んだ戀人を忘れ得ず、小說の中で自分たちを結びつけようと企てたロマンティストでもあつたのだ。これはまた逆に、その戀物語が、在來の平凡なハッピイ・エンドの物語にならなかつたのは、彼がレアリストであつたことによる、ともいひ得るであらう。現實の世界では、寶玉と黛玉との戀は遂げられずに終るが、それがすべてではない。彼等は天上の世界から、互ひに戀すべく運命づけられて、またその戀は遂げられずに終るべく運命づけられて降されたのだ。第一回に明らかなやうに、寶玉は神瑛使者の生れ替りであり、黛玉は絳珠草の生れ替りである。絳珠草は神瑛使者からもらつた水で女人の姿となることができたお禮を、神瑛使者を追つて人間界に降り、寶玉のために流す涙をもつて返したのである。紅樓夢の裏をひそかに流れるこのロマンティシズムの精神を見逃して、ただ寫實の面だけを追ふのは、片手落であり貴種流離譚的構想をもつた紅樓夢の全體を理解することにはならない。紅樓夢は、たしかに自傳としての要素が強い（これは自分の戀の物語を書いたためであるかもしれない）と思はれるし、曹雪芹が中國文學史上最初の寫實主義精神による小說を書いたのは、この自傳的要素の影響によると思はれるので、自傳乃至は寫實の面を特に重視するのは當然のことであるが、そのために、その反面を無視するやうなことがあつてはならない。中國の紅樓夢研究家は、兪平伯にしても周汝昌にしても、紅樓夢のすべてを、是が非でも史實によつたものとして解釋しようとしてゐるやうにみえるが、これは理解に苦しむ態度である。そこにどれだけの虛構があらうとも、紅樓夢の價値がいささかも減ずるわけのものでもないし、また虛構がなければ、史實調査の上からは好都合かもしれないが、文學的價値が增すといふわけではなからう。紅樓夢の偉大さは史實であると虛構であるとにかかはらぬといふことを知るべきである。